

---

# **俺の秘密**

和泉 優衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の秘密

### 【著者名】

和泉 優衣

NZ780H

### 【あらすじ】

蘭を待たせたお詫びに、トロピカルランドに誘うが体調不良で行けなくなり。。。新×蘭です。処女作なので突っ込みどころ満載です・・・。感想・評価お願いします。

## FILE 1・終始

黒の組織を倒し、手に入れたAPT-X4869のデータから、灰原が解毒剤を完成させた。

俺は悪いとは思つたが、蘭や少年探偵団のみんなには真実を教えない事にした。

だつて真実を言つても迷惑がかかるだろ？

いきなり、

なんて言えるか？

「江戸川コナンは工藤新一でした。」

みんな反応に困るだらうし、蘭には今までどおりに接してもうえなくなるかもしねー。

だから眞実を言わずに小学校のクラスのみんなにお別れをした。

”海外にいる両親の元へ帰る”

海外はとにかく遠いイメージらしく、歩美、光彦、元太はショックを隠しきれないみたいだった。

「コナン君、行かないで・・・。」

「『じめん。歩美。行かなきゃいけないんだよ・・・。』

「また会えますよね！？」

「光彦・・・おめーらに手紙かくから。」

「毎日か！？」

「そんな毎日もかけつかよ。1ヶ月か2ヶ月に1通でいいだろ？」

「絶対だよー！？」

「寂しくなりますね・・・。」

「寂しくなりますね・・・。」

( ロナンはこなぐるナビ、同じ街に住み続けるんだよな・・・ )

母さんに頼んでロナンの母親”江戸川文代”として迎えに来てもうつた。

「寂しくなるね・・・。」

「楽しかったよ。またね・・・。蘭姉ちゃん。」

「またいつでも来てねー。」

蘭は泣いていた・・・。

「めん・・・、『めんな・・・蘭。

俺は蘭を泣かせる」としか出来ないのか・・・?

でももう少しで工藤新一として会いに行けるから・・・。

待つてくれ・・・蘭。

FILE1・終始（後書き）

短かったので9月22日に大幅修正しました。

## FILE2：解毒（前書き）

遅くなつてしましました。次からは頑張ります。

「なにかあつたら連絡しなさいよ。」

「分かつてるよ。・・・まあ30分しても戻って来なかつたら一応様子見に来てくれねえか?もしかしたら死んでるかも知れないからな・・・。」

「ええ。分かつたわ。それにデータもとりたいしね・・・。」

「おひ。じやあなー!」

解毒剤を受け取ると、俺は自分の家に行つた。

”工藤新一”の家に。

着替えと水を準備して、解毒剤を飲んだ・・・。

ドクッドクッ

この感じ・・・

「・・・ツー」

・・・どちらかが上手くこつたよ'つだ。

やつと戻れた。

工藤新一に。

やつと・・・

本当に声で言えるんだ。

蘭。

・・・それにしても、体がだるい。

「工藤くん、生きてる?」

「・・・ああ、灰原か。」

「工藤くん、30分しても戻って来ないんだもの。心配したじゃな

い。

「わりい・・・。」

「それよつ、調子はどうひへ。」

「なんか、体がだるいし、つらい・・・。」

「幼児化した体が元に戻ったからよ。相当な体力を使ったからだと  
思うわ。蘭さんに会うのは明日で良いんじゃない？あとは栄養剤で  
も飲んで休んでたほうがいいわよ。」

「そうだよな。今日はおとなしく寝て、余るのは明日でやる・・・。」

「

そつ言ひと、俺は眠りに就いたのだった・・・。

## FILE2・解毒（後書き）

感想お願いします￥^\_^／

## FIE3・再会（前書き）

また遅くなつてしましました・・・。次は早くできるはず・・・。（  
\* \* ）

「ん・・・

あれから何時間寝たのだろうか。

・・・時計を見ると朝の7時すぎだった。

せっかく戻ったんだから、早速高校に行くか・・・。  
ずっと行ってなかつたから、留年か？復学させてくれるのか？  
疑問はあつたがここで考へても仕方がない。

とりあえず、蘭の家まで行こう。一緒に通学するためこ。迎えに。

俺は久しぶりに高校の制服を着た。懐かしかつた。

俺は朝ごはんを食べずに家を出た。本当の体で一刻も早く蘭に会いたかった。

・・・「ナンの時に毎日みてた」の家。

小学生から高校生になつたから景色が全く違つてみえる。  
背が伸びたといつもあるが、この姿で会える喜びや緊張のせ  
である。

でも俺、本当に戻れたんだなあ・・・。  
わづ「ナン」じゃないんだよなあ・・・。

ピンポン

「うーん。」

呼んだら、蘭がすぐ元気で戻ってきた。

「・・・新一？」

「蘭。おはよ。」

「おまえ、なぜなにさよ。一体どうしてたのよー心配したんだよ  
。」

「わりこ・・・事件がなかなか片付かなくてよ。」

「支度していくから・・・さよっと待つで。」

1年も待たせてしまったから一発くらこ殴ったが、やはり  
れなかった。

ただ、俺を見たときの泣きそづな顔は一生忘れられなやうだ。

「つぱり蘭に悪い」としまったなあ・・・。

「新一、お待たせ。」

同じ高校の制服を着た蘭が出てきた。

今日から一緒に居れるんだ  
。 。

「ねえ新一、風邪ひいてる?」

「え? ひいてないけど・・・。」

何の話かと思えば・・・。

「やうなうまいんだけど。新一と会つとも、いつも新一具合悪いからね・・・。」

「やうか? 気のせこだよ。」

そつか。

蘭に会つときはこつも副作用で具合悪かつたかもな・・・。  
てか蘭はそんなことまで覚えてるのか。

「そういえば、長い間待たせちまつたからお詫びに、トロピカルラノダ行かなーい。

「え、うん。行く！」

「明日、土曜日だから、明日でいいか？」

「新一と行けるならいつでもいいよー。」

「じゃあ明日な！約束！」

「あれ～！？」

うわつ

園子

なんでいるんだよ！

同じ学校だから仕方ないけど・・・。

「蘭！よかつたじゃない。待ちに待ったダンナが帰ってきて・・・。

「

「あ、うんー嬉しくよ。」

「てか蘭を置いてどこ行ってたの！？蘭、すごい心配してたんだよ  
？」

あ～。説教かよ。

これだから園子には会いたくないんだよ。めんどくせえ。

「まあまあ、せっかく帰ってきたんだからこれくらい・・・。  
許さないからね！」

「蘭がそういうなら許すか・・・。今度蘭を置いて居なくなつたら  
許さないからね！」

「わーったよ。」

「あれ！工藤じゃん。」

「死んだって噂だったのに。」

「てか復帰早々夫婦で登校かよ！いいなー。ラブラブー。」

クラスメイトが騒ぎ立てる。

「…………てか、死んでたらここにいねーよ。」

「…………！工藤、久しぶりの登校だな。」

「あ、お久しぶりです。先生。あの～、俺って留年ですか？」

「あ～。それは大丈夫だと思う。お前は成績もいいし、休んでたのも事件かなんかに首つつこんでたんだろ？」

「事件……まあ、そんなもんですね。」

留年はなんとか避けられたようで安心した。体が戻っても、留年した  
ら意味がないからな……。

・・・俺は、明日トロピカルランドにいくことで頭がいっぱいだつ  
た。

## FILE 5・早退

「 藤！ 工藤！」

「・・・はい？」

「お前聞いてなかつただろ？」

「あ、『めんなさい』。」

やばいやばい。ぼーっとしてた・・・。

次は好きな体育の授業だ。

しかもサッカー！！

授業が始まつて、座つて先生の話を聞いていた。

そのあと準備体操で立とうとしたら、いきなり視界が真っ暗になつた。

周りが見えるようになると、俺は砂の上に倒れていた。

俺・・・倒れた？

「・・・」

起き上がるうとしても起き上がれない。

「大丈夫か？工藤。」

「すみません。大丈夫です・・・」

結局、助けられながら、グランドのベンチに座らされた。

ははは。サッカー見学なんて・・・。

しかも、なんか、調子わりいし・・・。

外にいても治りそうになかったし、サッカーを見るだけっていうのがなんとも悔しかったので、保健室にいくことにした。

「あれ？ 新一は？」

「あ～、工藤なら保健室に行つたぜ。体育の時男女別にやつてるから知らないのか。」

「新一、何で保健室に行つたの？」

「え？ なんか調子悪かつたみたいだぜ。」

保健室には誰も居なかつた。

「 しんいち～？」

微熱だけど明日までに治すために早速するひこした。

37 . 5 . .

保健室に行くと、保健の先生がいなかつたから勝手に体温を測つた。

彼女は小さくつぶやいた。

「 ・・・明日、行けるのかな？」

「蘭<らん>。ダンナ、早退したみたいよ。」

「えー、園子、なんで知ってるの？」

「なんか、職員室で先生に言つたの。早退しますって。」

「新一、大丈夫かな？」

「明日とかにダンナの看病してあげたら？ きっと喜ぶわよ。」

「うん……。」

めつたに風邪をひかない新一が早退するなんて、少し半信半疑だつた。

## FILE5・早退（後書き）

まとめて何話か執筆しました。執筆した分全部投稿したので読み逃しのないようになります。

昨日、部活が遅くなつて帰りに新一の家によれなかつた。

だから私は新一に家に帰つてすぐメールした。

『新一大丈夫?』

すぐには返つてこなかつた。そして、寝る前にやつと返つてきた。

『明日行けない』

調子が悪いのだろうか。

行けなくなることの予想はしていたがやはりショックには違ひなかつた。

”ダンナの看病してあげたら～？”

ふと園子の言葉を思い出す。

まだ朝の6時だといつのに蘭は走りだしていた。

新一の具合が気になるし、もしかしたら新一がまた居なくなってしまうかもしれないと思うと不安になつて・・・。

インター ホンを連打しても返事がなかつた。だから電話してみた。

新一が電話に出た時は安心した。

新一に言われたとおり、私は門を開けて、中に入つていった。

新一はリビングのソファーに座つていた。灰色のスウェット上下。部屋は冷えていてヒーターはついているけどまだついたばかりのようだ。

「起しちゃつたみたいだね。」

「いいよ・・・。でか今日は『めん・・・。』

確かに顔色はあまりよくなかった。返事をするのもつらかった。  
寝起きだからか反応もおそれかった。

「ううん。気にしないで。お粥食べる?」

「あ～。。。食べる。」

「それまで上で寝ときなー。」

「じやあねうす。」

・・・お粥を作るのはそんなに大変じゃなく、新一が上に行つて10分くらいで上がってしまった。

「新一、出来たよー。」

返事がないから少しだめらつたが部屋に入った。

「う・・・ん。」

寒くて震えているみたいだつた。

「新一、熱あるんぢやない！？」

とつあえず体温計を探して手渡すと、布団を持ってくるとこした。  
布団を持ってくると測りおわついたらしく、新一が私に体温計を  
差し出した。

こんな高い熱なのに、本当に風邪なのがが疑問だつた・・・。

## FILE 6・高熱（後書き）

更新頑張っています。感想ください（^-^）

家に帰つても「のだるさ」が治る「」ではなく、むしろ悪くなつてゐる気がした。

家に帰るのもふらふらで大変だった。

『新一、大丈夫?』

蘭だ。俺の事心配してくれてるのか。

でもこのままの調子じゃ行けないよな・・・。行つても迷惑だらうし・・・。

びつじょ・・・。

・・・。

!

俺は悩んでいろいろいちに少し寝てしまったようだ。でもまだ調子が悪かつたので諦めて返信した。

『明日行けない。』

蘭、ショックかな・・・? それとも嫌われたか?

俺から誘ったのに。

ピンポン

( まだ6時だつてのにだれだよ・・・?)

ピンポン

・・。

・・・

チャイムが鳴りやんだけと思えば、携帯が鳴った。

「・・・はい。」

新一?新一の家まで来ちゃつたんだけど・・・。

蘭だった。朝早く何しに来たんだ？

「多分開いてるから勝手に入つて……。」

動くのがだるい。

蘭がお粥を作つてくれるみたいだ。うれしい。

蘭がお粥を作つてる間、上で寝ることになった。

・・・っ

部屋に入つてベットに横になると、急に寒くなつた。

「新一、出来たよ～。」

返事をしようと思ったのに返事が出来なかつた。しかし蘭は少しするトドアを開けて入つてきた。

「う・・・ん。」

「新一、熱あるんじゃない！？」

そう言つて体温計を渡すと、ビニカに行つてしまつた。

ペペッ

39・5 か・・・。

( なんなんだ。風邪にしては高くないか？まだ解毒剤飲んだときの疲れが残つてゐるのか？ )

蘭が布団を持つて戻つてきたので、体温計を差し出した。

”39・5”といつ高熱に蘭も驚いていた。

・ ・ ・ なんだよ。なんでこんなに体が重いんだよ。

「 ・・。」

とにかく体がだるかつた。

## FILE7・疲労（後書き）

いまのところ毎日更新できます￥へへ／  
ージ下をこ（^ ^）／

頑張るのでメッセ

FILE 8・失敗（前書き）

更新遅れてごめんなさい、

行き詰まつてました（――；）

この前初めてメッセージ貰いました＼＼＼＼＼

おつがど「ひ」ぞこもすー！

これからも頑張ってきます( ^ - ^ )

## FILE 8・失敗

。

寝てたのか・・・。

いつのまにか額に熱冷ましのシートが貼られていた。

しかし、体は一向に治る気配がない。

これは薬の副作用なのか・・・？

灰原に聞いてみつか・・・。

。あら、なあに？工藤くん・・・。恋愛の話ならお断わりよ？

「恋愛・・・ちがーよ。俺も、あの薬飲んでからいつも調子悪くて

よ、今日熱測つたら39・5 だつた。「

・・・で?

「・・・。」れつて解毒剤の副作用かなんか?「

あらあら。私が作った薬が信じられないのかしら・・・。

「別にそりこいつもりはねーよ。」

そり・・・。でも残念ながら 。

「・・・え?」

「新一。誰と電話?」

「あ・・・蘭。別にたいした電話じゃねーよ。」

「そっか・・・。ちよつと飲み物持つてくれるね。」

( -! )

「・・・ツ」

急に心臓をつかまれたみたいに胸が苦しくなつて咳が止まらなくなつた。

息をするのも大変で、

俺は声を出して蘭を呼ぶ」とも出来なかつた。

「新一ーへどうしたのー?」

(蘭)・・・( )

「・・・。」

体が熱い・・・。

声が出ないし、苦しかった。

「ぐあ・・・。」

「新一ー!」

( )ー( )

新一の体はとても熱かった。脈も異常にはやかつた。しかも苦しみ方が普通じゃない。

「・・・ツ

「待つて！ いま救急車呼ぶから！ 大丈夫だからねー！」

( 呼ばなくていい！ )

声は弱かず蘭は電話へと急ぐのだった。

ガチャツ

・・・え? 誰? この人・・・。見たことない・・・。

「え、えっと・・・誰ですか?」

訪問者は無言で中に入っていくのだった。

FILE9：訪問（前書き）

また遅れました（――；）

次こそは・・・。

メッセージくださーい（^ ^）￥／

10・12

突然やつてきた女のは新一のそばにより、なにかの薬を飲ませていた。

しばらくすると新一は樂になつたりしく、さつきの苦しみは嘘のように笑っていた。

「あら？ 何を驚いてるのかしら。 いつまでも小さい私でいることでも思つたの？」

「灰原つてそんな大人だつたんだなつて思つただけだよ。」

「失礼ね。 私はもう灰原哀じやなくて富野志保よ。」

「ああ。 わりい。 でもよ、さつきの電話本当か？」

「ええ。間違いないわ・・・。」

「なんでわかつたんだ?」

「・・・え?」

「・・・お前、自分の体で試しただろ?」

「・・・これ以上迷惑かけたくないかったのよ。」

新一に何の薬を飲ませたの?なんで治ったの?

あの人は誰なの?新一と何の話をしているの?

それに、新一・・・。

あの苦しみ方はなんなの?なにがあったの?あれは普通じゃないよ・。

・・。

なんかの病気なの? なんで言ってくれないの?

ねえ新一・・・なんでなの?

女の人は新一に何か渡すと帰つていった。

「新一のことが心配なんだよ・・・。さつき何もうつてたの?」

「ただの薬だよ。」

「新一、本当にただの風邪?心当たりとかないの?」

「風邪だよ。もう大丈夫だから心配すんな。」

でも残念ながらあれは失敗作だったの。

・・・あの灰原が失敗作？

これ、とつあえず毎日飲んで。副作用はおきないはずよ。  
出来るだけはやくつくるからそれまで飲んで・・・。

渡されたのは何田分か分からぬ大量の薬。

これをつくるのにも時間がかったんだと思いつと感謝の言葉しか出て  
こなかつた。

## F-H-L-E-1-O…最低(前書き)

サブタイに毎回歎んでます( 、 、 、 )

頑張ります・・・

10・16

解毒剤を渡した時、工藤くんはとても喜んでいた・・・。

なのに・・・。

私があの組織でみんな薬開発しなければよかつたのに・・・。

それに解毒剤も失敗作だった。

私のせいで工藤くんはとても苦しかった。

だからとうあえず鎮痛剤が効いてよかつた。

もし効かなかつたら新しい解毒剤が完成するまで苦しんでもいいつしかなかつた。

今まで私は工藤くんに喜んでもらいたいから解毒剤をつくりてきた。

罪滅ぼしの意味もあるけど、笑っている工藤くんを見てたくて・・・。

私、工藤くんのことが好きだつたんだ・・・。

ずっと前から1人の女性として見てもらいたかった。

でも工藤くんの隣には蘭さんがいた。

2人は昔からの友達でとても仲が良かつた。

そんな2人の間に私が入る隙間なんて1ミリもなかつた。

解毒剤を完成させてしまつたら工藤くんが私のところから離れ、蘭さんのところへ行つてしまふのは分かつていたから・・・。

だから失敗作なんかになつたんだ。

このままいたかった。

このまま幼児化したまま灰原哀と江戸川コナンならずつと一緒にいれる。

心の奥にはそういう気持ちがあつた。

宮野明美と工藤新一で一緒にいることは許されない」と・・・。

薬が完成しなければずつと一緒にいられる。

だから無意識に失敗作を作り上げてしまつた。

私は最低なことをしてしまつた・・・。

それで工藤くんをつらくなさせてしまつた・・・。

「ごめんなさい・・・。



氣まずい。

さつさ少し冷たくしてしまつた。

これ以上ばれるのが怖くて。

この空氣を先に崩したのは蘭だった。

「 新一。大丈夫?」

「 ……え?」

「新一、いま怖い顔してた。調子大丈夫……?」

「え、ああ……。さつきよつはいいかな……。」

「よかつた……。」

「さつき新一が苦しんでた時、何もしてあげれなかつたね・・・。あの女人の方が私よりもいいんじゃないのかなあ?新一の隣に居るのは私じゃなくても・・・。」

「違う。」

「何が違うの?新一。」

「さつきの女は・・・。」

そこまで言つてから気がついた。解毒剤の話をしてもう一度俺の正体を明かすことになる。

だからとつやに嘘をついてしまった。

「俺、病氣だから・・・。」

「え？ 新一、病氣なの・・・？」

「ああ。それでさつきの人は病氣の研究者。俺に薬を渡しに来ただけだよ。」

「そうだったんだ・・・。教えてくれてもよかつたのにね。」

「ああ。今まで黙つててわるかつたな。」

とつさにつけた嘘が笑える。もつといい嘘があつたんじゃないのか・・・？

それに蘭についた嘘が増えてしまった。まあこれも病氣といえば病気なのが・・・。

自分の正体、黒の組織、自分の気持ち・・・いつまでも蘭に隠し通そうとしている自分に笑えてくる。

どうせいつかはばれてしまうんだ。

本当のことを言つべきだったか？ いつものこと言つてしまつたほうが楽なんじやないのか？

「それって治る病気なの・・・？」

「いや・・・。」

「え・・・。」

「・・・俺は大丈夫だから。蘭。だから・・・隣に居るのは私じゃなくててもいいなんて言づなみ・・・。」

「だつて・・・。」

「俺の隣は蘭だけだからな。蘭が俺のこと嫌なら仕方ないけど、俺は蘭がいいから・・・。」

「私も新一じゃないと嫌だよ。だから・・・病氣治してね。」

「ああ。絶対・・・。」

治してみせるや・・・。

そしたら蘭に言わなきゃな・・・。

FHLE11・約束（後書き）

新しい作品に手をつけてしまいました( ̄ ̄ )

そっちの方もよろしくです( ^ ^ ) ¥／＼

10・18

ピンポーン

ガチャツ

「 灰原。」

「あら・・・何の用かしらもう話す事ならないわよね?それに、私は灰原じゃない、富野よ。」

「わりい、富野・・・。用がなかつたらこねーよ。・・・てか!お前もしかして泣いてたのか?」

「・・・私は泣くのも許されないのかしら?」

「そうじゃねーよ。何で泣いてんだよ?」

「解毒剤、失敗して」めんなさい・・・。私、結構前から工藤くんのこと好きだつたみたい・・・。だから・・・。」

「俺もさ、富野の」と、結構好きだつたぜ。・・・もちろん蘭には負けるけどな。」

「・・・気付いてたの?」

「バーロオ・・・。俺は探偵だぜ?宮野が失敗なんて今までなかつたし、組織を倒した時にデータは十分とったからな。それで失敗作ができたならそういう事だろ?」

「ごめんなさい・・・。」

「そんなに謝らなくていいよ。鎮痛剤も宮野が作ったんだからもういいだろ?それに・・・お前はいつでも俺の相棒だからな!」

「ありがとう・・・。」

「だからさ・・・あの・・・。」

「はい。」

宮野が差し出した手にはカプセル状の薬があった。

「あら? いろいろの? いろいろなら捨てるわよ?」

「え?」

「これって・・・。」

「言わないと分からぬの? APTX4869の解毒剤よ。」

「・・・もうできたのか?」

「ええ。少し改良したら出来たの・・・。」

「確率はどのくらいだ？」

「100%……。これで失敗したら首吊つても良いわよ。」

「別に首吊らなくてもいいけど……。やけに自信満々だな？」

「だつて次失敗したら、さすがのあなたも私のこと嫌いになるでしょ？ もう一人にはなりたくないの……。」

「俺は富野と一緒にすることは出来ないけど、だからといって富野を1人にはしないぜ？」

「ありがと……。あなたには助けてもらつてばっかね。」

「富野こそ解毒剤、ありがとな！」

「これで完全に戻れる……。」

富野・・・ありがとな。

マジで感謝してる。

蘭、もう少しだから・・・。

解毒剤を受け取ると俺は駆け足で家に戻るのだった。



## FILE12・謝罪（後書き）

この連載もそろそろ終わりになります。

感想、評価お願いします（○^ ^○）

連載“伝えたい・・・”完結しました。

そちらの方もよろしくお願いします。

「新一どこ行つてたの?あんまり寝てないんだから寝てたほうがいいんじゃないの?」

「ああ。モーする。」

確かに蘭の言つとおりだ。発作の時に薬を飲んだけど、それで完全に治つたわけではないのだ。

現にまだ体が重い。

もひつた解毒剤を飲むときは体力が必要だ。あの痛みは半端ではない。この体では耐えきれないかも知れない。

・・・死ぬのか?

もじこの体が耐えきれなかつたら・・・。

それとも戻れないだけか？

「新一、もうさつきみたいに苦しくならない？大丈夫？」

「発作のことか？それは分からぬ……けど薬があるから大丈夫。  
…。」

「そつかー、よかつた。……もう夜だけど帰りたくないよ……。

「

気がついたらもう夜の8時くらいだった。いつもなら蘭は帰らなければならぬ時間だ。

「帰りたくない……。今、新一を1人にするのがものすごく怖い  
よ……。」

「……なんで？」

「新一がまた私の前から居なくなるんじやないか、つて……。今  
かえつて明日来たら死んでた、なんてヤダよ……？」

「蘭は大げさだな。これくらいじゃ死なないって……。」

「だつて……心配なんだよ。」

「じゃあ俺ん家に泊まつてくれか? そうすれば帰らなくていいだろ?」

「え、泊まつていーの?」

「この家に一人つてのは結構寂しいんだぜ? それに……まあ、居たほうが安心だからよ。蘭はいいのか? 俺ん家泊まつても……親とか。」

「うそ。多分許してくれると想ひ。お父さんご電話してくるね。」

「お父さん、オッケーしてくれたよー。病気なら一緒に来てやれだつて。」

「はは。よかつた。」

「うさ。あー、ビロで寝ればいいかな?」

「ベニドサヒコ。空いてる部屋ならこいつはあるし・・・。」

「じゃあ隣の部屋にする。なにかあったら呼んでねーすぐ行くから」

「ああ。ありがとうな。」

「こいつにしあうか?」

「いつなら大丈夫?」

「俺はいつ戻れる?」

もし、解毒剤を飲んで、そのまま死んだり?

もとに戻るどころか、蘭に伝えることも出来ない。

嫌だよ・・・。

考えても答えは出なかつた。

## F-I-L-E 1-3・不安（後書き）

1週間、ぶりですね・・・。

次の連載とかについてメッセージとかくださらうとうれしいです。

「蘭、実はさ・・・。」

「なあに?」

「江戸川コナンって居ただろ?あれ、俺なんだよ。」

「コナンくんが新一?・・・。」

「今まで黙つてて」めん・・・。」

「知つてたよ。なんとなく。仕草もそっくりだし。」

「気付いてたのか?・・・。」

「言つてくれてありがとう。待つてたんだよ。それに・・・もう完  
全に治つたんでしょ?」

「多分完全だよ。」

「元気な新一が戻つて来ててくれただけで嬉しいから・・・。」

「ありがとう・・・あつ・・・蘭一よけろー。」

ものすゞ」ースペードで走行するトラックが迫つて来た。

「え?」

( ばかり )

とつそに蘭を突き飛ばした。

「・・・ツ」

目の前が真っ暗になつた。

「新一・・・？」

「 しん一ちー？」

蘭。

「ん・・・。」

「苦しきの?」

「え?」

「新一すいぶんうなされてたよ・・・?」

「・・・?」

(寝てたのか?..)

「発作とかじやない? 平気?」

「・・・発作じゃなーよ。」

「良かつた。」

「ああ。モーだな。」

(あれは夢か? 体が復活して、蘭に全てを打ち明けた時に車にひかれるなんてやな夢だったな。。。)

「今日は調子いい?」

「もういえば今日まだるくないな。」

“ 今日なら薬飲んでも平気だらうか ”

・・・よし。

今日飲もう・・・。

今日は調子がいいから大丈夫だよな。

それに・・・体の変化とかしないから・・・。

「なあ、蘭。いまから薬飲むから別の部屋行つてくれねーか?」

「いいけど・・・。薬くらい私の前で飲んでもいいのに。」

「特別な薬なんだよ。もしさ、10分しても出て来なかつたら様子見に来てくれないか?」

「うん・・・。」

一応着替えや水などを準備してから薬を飲んでベッドに横になった。

「 新一！」

「ん・・・。」

「大丈夫？」

「ああ。薬飲んだからもつ平氣だよ。」

「あの・・・新一の病氣の研究者が作った薬？」

「ああ。これで完全に戻れるって・・・。」

「そつか。新一、顔色良くなつたみたいだよ。」

「治つたつて事なのかな？？？今まで」「めんな。いろいろ。」

「いいよ。新一が帰つてきてくれただけで嬉しいから。・・・そういえば新一つてさ、コナン君に似てるよね？」

「えつ　　てかさ・・・今まで黙つてたけど・・・。」

「でもね、コナン君は新一なんかよりもかわいかつたから違うよね。もし新一がコナン君だったらぶん殴るけど。」

「え、なんで？」

「だつて一緒にお風呂とか入つたもん！もし新一だったら一生口聞いてやんないから！」

「はは・・・。」

「まあ、そんな事あるわけないけど。」

蘭に俺の正体を話す日はまだまだ先になりそうだ。

FILE14・実行（後書き）

重大なミスを犯しました、

15話を14話の所に上りしてありました。

「指摘ありがとうございます。

11.16

「みてみて！新一。コナン君から手紙来た！」

新一は両親が住んでいるロスから差出人がコナンの手紙をわざわざ送つてもらったのだ。

蘭姉ちゃんへ  
元気ですか？  
僕は元気だよ！  
新一兄ちゃんと  
仲良くやつてる？  
遠い所にいるから  
すぐは行けないけど  
また日本に行つて、  
蘭姉ちゃんに  
会いたいな。

江戸川コナン

「んー・・・。」

「どーした？蘭。」

「コナン君に新一が帰つて來たこと言つたつけかなー？つて……。

「

(あー やべっ……。)

いつか話すその時までコナンは存在し続ける……。

それまではコナンの存在を疑わないで。

1人2役はなかなか大変なんだからな。

まだ秘密は打ち明けられそうにないけど、いつかは話すから  
な。

「そついえば、蘭……。」

「ん？ なあに？」

「」の前行けなかつたからや、トロピカルランド行ひつかー。」

「うん！」

「ナン君へ  
私は元氣だよ。  
いまだから言えるけど、  
コナン君が新一なんじや  
ないかつて思つてたの。  
もしそうだつたとしても  
私は受け止めるよ。

つて、コナンに言つても  
意味ないか・・・。

p・s 私も会いたいよ。

毛利蘭

「ナム君から本当の事を聞くのが怖かつた。  
やけに怖がつた。

「ナム君から本当の事を聞くのが怖かつたの。

も「おわれる」とは分かってる。

またいつか話してくれるまで待ってるよ。

次話してくれたら最後までしつかり聞くから。

それまでは知らないふりしておくな。

ばれないと思つてる名探偵さん。

F-H-E-1-5・秘密（後書き）  
(あく書き)

やっと完結しました。・・・

最後まで読んでいただきありがとうございました。

感想、メッセージお待ちしています( > - < )

リクエスト受付中ですよ( - - )

11・20

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8780h/>

---

俺の秘密

2010年10月9日23時25分発行